様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３３３０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2017
課題番号：２５８６２２４７

研究課題名（和文）ストレングスモデルに基づく行動制限最小化看護介入の開発に関する研究

研究課題名（英文）Nursing care based on stregth model　for minimizing coercive measures

研究代表者
長山　豊（NAGAYAMA, Yutaka）

金沢医科大学・看護学部・講師

研究者番号：１０６３６０６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：ストレングスモデルを保護室の看護に導入することで、隔離の短縮、看護介入の認識や感情の変化を検証した。3施設6病棟の看護師61名ともにアクションリサーチを行い、隔離中あるいは保護室の入退室を繰り返す患者10名に介入した。ストレングスモデル導入前後で隔離時間に有意な差はみられなかった。看護師は、患者の価値観に対する理解を深め、患者との共同意思決定を重視していた。また、身体状態の増悪を予防することで患者のニーズを充足させていた。患者の強みに着目することは看護師自身の強みを導き出すことにつながり、看護師は強みに着目する楽しさや意義を感じていた。一方で、患者のニーズを満たす関わりへの葛藤も生じていた。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to evaluate the efficacy of reduction of seclusion and the changes of nursing perception and feeling, by the nursing care based on the Strength model. Action research was conduted with 61 nurses from six psychiatric wards at three institutions, and nurses intervened for 10 patients in seclusion room or repeated entry and exit. Researcher conducted focus group interviews to nurses. There were no significant differences between the term of seclusion before and after the introduction of the Strength model. Nurses developed understanding of patient's value, and considered shared desicion making. Patient's need satisfied by preventing aggravation of phisical condition. Focusing on patient's strength lead nurses to find nurse's strength, and it was gaved nurses pleasures and the meaningful senses. Meanwhile, conflicts related fulfilling patient's needs have occurred.

研究分野：精神看護学

キーワード：行動制限最小化　ストレングスモデル

１．研究開始当初の背景

諸外国では、精神科病院の看護師が行動制限を受けている患者のリカバリーに視点をおいて看護介入を実践した結果、隔離・拘束の件数が減少した(E-Morris, 2010)報告や、患者中心に焦点を置いた看護介入ケアを導入したところ、隔離時間および隔離時の強制的な薬物投与の回数が減少した(Sullivan, 2004)という報告がある。これらの介入研究に共通して認められるのは、精神科病棟の看護師が患者の健康的な側面を引き出すために、きめ細かい観察と評価を行い、患者中心の看護介入モデルを実践した点にある。

近年、国内でもリカバリーの概念に基づくストレングスモデルにより看護展開を実践した報告が増えている。ストレングスモデルとは、支援者と対象者の協働的な関係を基盤として、支援者は対象者のストレングス（性格、才能・技能、環境、関心・願望）を明確にし、対象者が自ら設定した目標を達成できるように支援していくことである(Rapp, 2011)。隔離や身体拘束という強制的な治療手段の中では、患者は自己決定や自己表現する機会が極端に奪われる。

そのため、医療者側が問題志向型の視点に基づき、専門家主導で設定した目標や基準に沿って患者を評価するという、パターナリズムの視点に立った援助に偏りやすい。そこで、精神科病棟の看護師がストレングスモデルの視点に基づいて看護介入を行うことによって、患者が主体的に隔離解除へ向けた目標を見出し、早期に自律した生活を立て直すことができるようになると考える。さらに、患者の日常生活が安定化することに伴って、患者が自己の症状をマネジメントできるようになり、隔離や身体拘束の早期解除に結び付くことが期待される。

また、国内外の研究報告によると、隔離や身体拘束などの強制的治療の中で、看護師はジレンマを抱えやすいことが報告されている。そこで、患者のストレングスに着目した看護介入を導入することで両者の良好なパートナーシップの構築につながり、看護師の自尊感情が高まり、看護師が抱えるジレンマや否定的感情が軽減される可能性がある。

２．研究の目的

保護室での看護介入にストレングスモデルを導入することによって、隔離の施行期間の短縮に対する効果、看護師の援助における認識や感情の変化について明らかにする。

３．研究の方法

(1)研究デザイン

精神科病棟看護師との協働によるアクションリサーチである。

(2)研究対象

精神科病院 3 施設の精神療養病棟 6 病棟である。研究対象者は看護師 61 名、保護室を使用している患者 10 名とした。

(3)調査方法

①ストレングスモデルに関する学習会の実施

調査開始前に、研究者が対象病棟の看護師全員にストレングスモデルに基づくアセスメントおよび介入プロセスに関する学習会を実施した。アセスメント方法は、Rapp & Goscha のストレングスモデル(2014)を基盤とした。アセスメント方法については、現在の強み・現在のニーズ・過去に獲得していた強みの 3 側面について、対象患者とのコミュニケーションを通して対象看護師が捉えている強みを挙げる。強みを挙げる視点として、日常生活、経済面、仕事・教育・専門知識や技術、支援者との関係、快適な状態、余暇、価値/信条の 7 項目である。対象看護師が対象患者とのコミュニケーションを通して得た情報に基づいて、対象患者の強みを挙げる。

介入プロセスにおいては、ストレングスモデルにおけるアセスメントを踏まえて、対象看護師が対象患者にとって強みと捉えられる内容について、会話に取り入れたり、一緒に活動したりするなど、強みを活用した看護実践を行う。

②対象看護師へのグループインタビュー

学習会終了後に、研究者は 2017 年 8 月から 2018 年 3 月にかけて、月 1 回程度で 3 施設 6 病棟の対象看護師にグループインタビューを行った。インタビューの内容は、対象患者に対するストレングスモデルにおけるアセスメントおよび介入方法の検討、患者への援助に対する認識や感情の変化であった。これらのグループインタビューを踏まえて、対象看護師が対象患者に対して普段の看護援助にストレングスモデルの視点を取り入れて介入を継続した。

③対象属性に関するデータ収集

対象看護師は、看護師経験年数と精神科経験年数についてデータ収集した。

対象患者は、性別、年齢、診断名、罹病期間、現在までの入院回数・入院期間、過去 1 年間における隔離回数・隔離延べ日数・隔離が必要な理由隔離を診療記録からデータ収集を行った。

また、研究実施期間の前後において、個別事例毎に、保護室での隔離延べ時間（開放観察時間を除外）、治療の状況（薬物療法における種類・投与量、薬物療法以外での心理社会的療法の有無）、主な看護介入の内容について診療記録および看護記録、グループインタビューにてデータを収集した。

④データ分析

対象患者の属性は、度数および平均値を示した。保護室での隔離期間が長期化している患者 8 名に限定し、ストレングスモデル導入

前後での延べ隔離時間の差、薬物療法におけるクロルプロマジン換算値について対応のある t 検定を用いて比較した。有意水準は 5%未満とした。　また、具体的な看護介入、および、看護師の認識や感情の変化について患者事例毎に整理し、共通点を抽出した。

４．研究成果

(1)対象の属性

看護師は 61 名で、看護師経験年数の平均値が 19.1 年、精神科経験年数の平均値が 14.2 年であった。

患者は 10 名で、男性 5 名、女性 5 名であった。年齢は 48.6±10.7 歳であった。主な診断名は、統合失調症 8 名、窃触障害 1 名、知的能力障害 1 名であり、平均罹病期間は 28.1±13.0 年であった。入院回数は 5.4±5.0 回、現在の入院期間は 13.7±14.0 年であった。過去 1 年間における隔離回数は 3.0±2.1 回、隔離延べ日数は 160.3± 119.3 日であった。隔離理由は複数の理由が存在している者が 8 名を占めた。具体的な理由は、「不穏、興奮」が 6 名、「他患者への迷惑行為」が 5 名、「暴力」が 4 名、「自殺企図、自傷行為」が 2 名、「多飲水」が 2 名であった。

⑵ストレングスモデル導入前後の隔離時間の変化

ストレングスモデル導入前後における隔離延べ時間について、開放観察時間（隔離を中断している時間）を除外して算出し、表 1 に示した。隔離期間が長期化している患者 8 名(A～H)に限定し、ストレングスモデル導入後に延べ隔離時間が減少した患者は 5 名であった。また、研究終了時点で隔離解除の状態を維持できていた患者は 3 名(C、E、F)であった。導入前群が平均 2830±783 時間、導入後群 2461±835 時間であり、隔離時間に有意な差はみられなかった（p=0.461）。

表1　ストレングスモデル導入前後での隔離延べ時間の変化

	前	後
A	3634	3082
B	3383	1130
C	2667	1435
D	1585	3502
E	3634	2364
F	1933	2482
G	2514	3224
H	3297	2473
I	104	281
J	273	0

⑶ストレングスモデル導入前後の薬物療法の変化

ストレングスモデル導入前に非定型抗精神病薬単剤で治療されていたのは 5 名（B、C、D、F、I）、2 剤（A、E）が 2 名であった。また、精神運動興奮などに対する鎮静を抑えるために定型抗精神病薬（ゾテピン、レボメプロマジン、クロルプロマジン等）投与は 6 名（A、B、F、G、H、I）、気分安定薬（バルプロ酸ナトリウム、炭酸リチウム）投与は 6 名であった（B、C、E、G、H、J）。ストレングスモデル導入後、2 名（B、D）が非定型抗精神病薬 2 剤併用となり、1 名（E）が単剤化した。ストレングスモデル導入前後でのクロルプロマジン換算値(mg)の平均値は表２の通りである。ストレングスモデル導入前 537mg、導入後 555mg で有意な差はみられなかった。（p=0.736）

表2　ストレングスモデル導入前後でのクロルプロマジン換算値(mg)の変化

	前	後
A	1257	1257
B	905	1205
C	159	23
D	400	215
E	587	400
F	988	988
G	94	185
H	0	41
I	709	735
J	275	504

⑷ストレングスモデル導入による看護介入の認識の変化

ストレングスモデルを踏まえた看護介入に伴って、主要な看護師の認識の変化について、個別事例を踏まえて説明する。

①患者の行動に対する理解の深まり

看護師は、患者が日常生活において、どのような思考や感情をもって行動しているのか、より深く推察するようになった。そして、患者が隔離の適応になりうる問題行動を起こした時に、その行為の背景にある患者独自の理由に焦点を当てて患者の行動の意味を理解しようとする姿勢が重要であると看護師は考えていた。たとえば、患者Aにおいては、音楽を聴くことがストレングスであるにも関わらず、ＣＤラジカセを投げつけて壊してしまう行動があった。患者Aは「音楽を聴いていたら、自分の気持ちと同じものが出てきて、腹が立った」と、症状に起因された行動ではなく、患者Aの自然に発生した怒りの感情が行動化されたものであると語っていた。

患者Ｆは、女性患者やスタッフに対して接近し身体を触るという問題行動が断続的に

みられていた。看護師は、患者が悪意を持って行動している訳ではなく、相手が喜んでもらえるだろうと思い、スキンシップの手段として行動化してしまうことをアセスメントしていた。患者Ｆは、問題行動を隠すことはなく、必ず毎回謝罪する様子がみられており、むしろ、衝動的に問題行動を起こさないように我慢しているという場面も看護師は捉えていた。

患者Ｈは体幹幻覚があり、スタッフに暴言を吐く様子が頻回にみられるが、常に病的世界に支配された行動をとっている訳ではないことを看護師は捉えていた。研究プロセス後半において、患者Ｈは看護師に暴言を吐く理由について表出していた。患者は、本当は「自分に言いたいこと」を相手にぶつけてしまっており、暴言を吐いたことについて反省していた。その後、看護師に対して素直に自分の思いを表出するようになり、退院後の生活を具体的に考える様子が増えていった。

②患者の価値観に対する気づき

看護師は患者の生活行動に対する理解を踏まえて、患者が価値を置いている事柄について洞察を深めようとしていた。たとえば、患者が病棟内という小さな社会の中で何らかの役割を担っていることを、看護師は認識していた。患者Ａは、他患者が車椅子で自走しているのを押してあげたり、看護師のケアを手伝おうとしたりするなど、他者に貢献したい、協力したいという願望が行動となって表れていた。

また、患者Ｄは、私物を細かく破って分解するという行動パターンがみられており、それを看護師は単に問題行動と捉えるのではなく、物に対する「興味」や「探求心」といった表現でとらえ、破ること自体に患者にとって何らかの意味があるのではないかと考えていた。

③患者の意思表出を支える関わり

コミュニケーションにおいて、相手にうまく自分の意思を伝えることが困難であったり、相手の話を被害的に捉えたりなど、双方向のコミュニケーションが困難であったり、解釈が偏る傾向があった。そのため、看護師は、どのような意思を患者が抱いているのか、丁寧に受け止めようとする姿勢をもって関与していた。たとえば、患者Ａは何か言いたげにしているが言葉を発さずに立ち止まっていると、看護師は何らかのサインが出ていると考え、患者の思いの表出を促していた。

そして看護師は、できるだけ患者が自分で選択し、決定する機会を確保することを意識していた。患者Ｂは、間食をプリンとヨーグルトを交互に摂取しており、看護師は本日患者が何を選択するかは分かっていたとしても「今日はどっちを食べる？」と尋ねていた。日常生活の些細な場面であったとしても、患者が自分の意思を表現できることを重視していた。

④患者との共同意思決定を重視した関わり

看護師は、問題行動を繰り返す患者に対しては、強制したり、制止したりするといった看護師主導の関わり方に傾倒しやすいことに気づいていた。ストレングスモデルに基づいて、患者を多面的に理解するプロセスを経て、患者と共同する、対等な関係性を構築していた。この共同意思決定に基づくアプローチは、患者が問題行動に対する対処行動を主体的に獲得することに寄与していたと考えられる。患者Ｅは多飲があり、看護師は飲水を制限するよう声掛けしていたり、行動を観察していたりしたが、患者は声を荒げて抵抗を示すことが少なくなかった。看護師は、少しずつ声のかけ方を工夫し「もう、いいんじゃないかな」「また、今度飲んだら」などと伝え、患者は笑顔で謝り、水分摂取を徐々に自制できるようになり、最終的には隔離解除に至った。

患者Ｇは衝動的に自傷行為を行う傾向があり、看護師はその場面を患者と一緒に振り返り、どんな感情が生じたのか、その感情が生じた時にどのような対処をしたらよいのか、時間をかけて一緒に考えるという対応をとっていた。そして、患者Ｇにとっての願望である「家族と外出すること」を実現するために、看護師と相談しながら自分で対処方法を考えられるよう支援していた。

また、患者Ｈは洋服を購入しに行きたいという願望があった。看護師は、患者の目標が実現できるように支援すること、隔離解除になったら一緒に外出して服を買いに行こうと伝えていた。看護師は、患者が近い将来にやりたいことを具体的にイメージできるように支援していた。そうすると、患者は素直に自己の感情を表出するようになり、空腹時に他患者の物を盗んで食べてしまうという悩みを看護師に表現するようになった。患者は欲求を抑えるためにどうしたら良いか看護師に自ら相談し、看護師は拒食すると盗食につながることを伝え、食事を適切に摂取するための工夫を共に話し合うという関係性が構築されていった。

患者Ｊにおいても、過食や多飲により保護室に入っていた事を踏まえて、隔離になる基準を医師が患者に示したところ、患者にとって飲食にブレーキをかけることができ、再隔離には至らず生活できていた。患者は「何もしたくない」という思いが根底にあったが、作業療法で塗り絵をするなど、患者にとって興味や関心を感じる活動を看護師が促すと、応じてくれている様子がみられていた。

⑤率直な感情を表出し合う関係性の構築

看護師が患者に対して感情を抑制するのではなく、その時その場で生じた感情をできるだけ率直に伝え、患者と対等な感情のやり取りが行える関係性を築いていた。たとえば、

患者Aは、不調時のサインとして身体が斜めに傾き、不規則で不自然な歩き方になっていた。その場面で、受け持ち看護師は「あなた、しっかりして」とストレートに伝えると、姿勢が直り、普段通りの動き方に戻ることがあった。

また、患者Gに対して、研究プロセス後半において、看護師は自身の感情を率直に伝えるようにしていた。看護師全員が患者Gに期待していること、対処行動を身に着けてほしいこと、看護師との約束を破る行動をされるとがっかりすること等である。看護師が怒りを感じた時も、怒っている雰囲気を出して、なぜ怒っているかという理由も伝えるようにしていた。患者Gも看護師に率直な感情を伝えるようになり、「自分が場の空気を読めない」「どう対処したら良いか分からない」などと表現するように変化していった。

患者Iにおいても「退院して仕事につきたい」「自由になりたい」という願望を踏まえて、看護師は入院中に衝動的に問題行動を繰り返していては、患者が望む生活が手に入らないことを率直に伝えていた。退院後の生活では、患者が関わりたい人と連絡を自由に取り合え、仕事を探すこともできるため、今後の人生を考えて現在の不自由さに耐えながら、集団生活における規則を守ることの大切さを伝えていた。

⑥身体状態の増悪を防ぐことで患者のニーズを充足する

看護師は患者の願望や希望を充足する上で、患者の身体状態の健康が保持されるように看護介入の創意工夫を行っていた。これは、身体的健康を阻害する要因に対する予防的な関わりを意味する。従来の問題志向型の看護介入がストレングスモデルを基盤とした関わりを推進することにつながると考える。

患者Bは「常食を食べたい」という希望があるが、イレウスを繰り返しており、固形物の摂取が困難であった。看護師は、間食にヨーグルトやプリン、葛湯などできるだけ消化の良い間食を取り入れたり、腸蠕動を刺激するために体操を一緒に行ったりしていた。

また、患者Fは食事をとることが楽しみであるが、咀嚼力が弱く、固形物の摂取が困難であった。そのため、昼食前の咀嚼訓練を作業療法士と連携しながら行っていた。

⑦患者の過去の資源を活用する

長期の入院生活において、患者のその人らしさが失われていった側面があることを看護師は気づいており、以前の生活を思い起こしてもらえるような看護師側から積極的に働きかける関わりがみられた。

患者D（女性）は、以前、洗面や歯磨きを几帳面に行っており、部屋のゴミも自ら捨てており、髪型も綺麗に整えていた。現在は、男性用の服を着用し、私物やごみが散乱し、髪型にも関心を向けない様子であった。看護師は、私物を片付ける箱を患者と一緒に作り、一緒に部屋の掃除をした。また、入浴時はこれまでスタッフ側で衣類を準備していたが、自分で衣装棚から洋服を選んでもらうようにした。保護室内には、洋服棚が入っていなかったため、室内に棚を入れると、自分で棚の位置を使いやすい場所を考えて動かしたり、几帳面に服をたたんだりする様子がみられた。

⑸ストレングスモデル導入による看護師の感情の変化

①患者の強みに着目する楽しさ

患者のストレングスや人間味を掘り起こして看護介入に反映させていくプロセスが、そのまま看護師自身のストレングスを発見することにつながり、強みに着目する楽しさや意義を実感していた。

たとえば、患者Dにとって大事な物を片付ける箱を、患者が主体的に創作できるように支援するという作成プロセス自体に楽しさや喜びを感じていた。患者Eにおいては、看護師が関わり方を受容的に変容させていくことで、患者自身も他者に対する粗暴な行為が減っていく体験をしていた。病棟の看護師一人一人が患者の存在を尊重する姿勢を有しており、患者にとっての環境のストレングスであると共に、看護師自身が自己の存在を価値づけるストレングスにもなりうることを実感していた。

②患者のニーズを満たす関わりへの葛藤

患者と会話が成立しない状況や衝動的な欲求をコントロールできない状況において、看護師は患者のストレングスを捉えることはできても看護に活用することが困難であるという葛藤を抱えていた。

患者Bは音楽の仕事をしたいという夢があったが、CD を所持していると様々な思考が次々と浮かび、欲求が肥大化して気分が高揚する傾向があり、他者への暴言や暴力という行動に発展することもあった。そのため、看護師は、音楽に関連した話題を極力避け、音楽に関係した所持品は精神症状の増悪につながる恐れがあるため制限する対応がとられていた。一方で、隔離解除後に外出や外泊を行った際に、大きな気分変動がみられない様子も体験した。看護師は精神症状の悪化のリスクを踏まえながらニーズを満たす関わりを積極的に検討する大切さと困難感を同時に感じていた。

患者Cにおいては、ニーズを満たすことで要求が以前と比べて一層増え、自分の要求が通らないと不穏になる様子が増えていった。際限の無い要求に対しては、看護師は患者の所持可能な物品の範囲や時間帯など、明示して伝える必要性を感じていた。多様な活動に関心を示す患者の場合は、注意や関心が分散しやすいが、ある特定の事象に関心が集中しやすい患者に対しては、看護師はニーズを満

たす事への困難感を抱いていた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計１件）
①長山豊、新井里美、田中浩二、深沢裕子；保護室での看護へのストレングスモデル導入による行動制限最小化への効果、日本精神保健看護学会第 28 回学術集会、2018 年 6 月 24 日

６．研究組織
(1)研究代表者
長山　豊（NAGAYAMA,Yutaka）
金沢医科大学・看護学部・講師
研究者番号：１０６３６０６２